

山を越えて行く時に

2021年6月23日  
大学宗教センター長 栗原 健

**聖書:詩編 121 編 1 節-8 節**

- <sup>1</sup> 都に上る歌。／目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。／わたしの助けはどこから来るのか。  
<sup>2</sup> わたしの助けは来る／天地を造られた主のもとから。  
<sup>3</sup> どうか、主があなたを助けて／足がよろめかないようにし／まどろむことなく見守ってくださるように。  
<sup>4</sup> 見よ、イスラエルを見守る方は／まどろむことなく、眠ることもない。  
<sup>5</sup> 主はあなたを見守る方／あなたを覆う陰、あなたの右にいます方。  
<sup>6</sup> 昼、太陽はあなたを撃つことがなく／夜、月もあなたを撃つことがない。  
<sup>7</sup> 主がすべての災いを遠ざけて／あなたを見守り／あなたの魂を見守ってくださるように。  
<sup>8</sup> あなたの出で立つのも帰るのも／主が見守ってくださるように。／今も、そしてとこしえに。

詩編 121 編は、詩編の中でも特に愛されている歌であり、先日行われた学長・校長就任式でも朗読されました。

山が多い日本に住む私たちにとっては、冒頭の「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか」という言葉は、非常に魅力的です。緑豊かなやさしい山を見上げて、神の愛に思いをはせる。そうした心なごおイメージを与えてくれるからです。殊に日本には、出羽三山のように山岳信仰の伝統があります。山は神聖で清らかな場所、神が宿る場所であるとするイメージがあり、それがこの詩をますます心惹かれるものにしていきます。夕暮れ時に遠く泉ヶ岳を見ながら、そうした感慨にひたることもあるのではないのでしょうか。

しかし、この詩編を作った人は、果たしてそのような思いで山を見ていたのでしょうか。どうやらそうではないようです。今日は、古代イスラエルの人々がどのような思いで山を見上げ、神のこころを感じていたのかをたどりながら、私たちが学べることを考えてみたいと思います(この詩編はいろいろ解釈が分かれています。私の読み方は主にリンバークという聖書学者の見解をベースにしておりますが、そうした諸説の1つとしてご理解下さるようお願いいたします)。

まずこの歌の背景を見ましょう。1 節と 2 節については、これからエルサレムに向かっ

て巡礼の旅に出る旅人が、遠くにそびえる、自分がこれから越えて行かなくてはいけない山を見上げながら歌った言葉である、と考えることができます。それに続く3節から8節では、「わたし」の独言から「あなた」への語りかけへと変わります。別の人、おそらく旅人を送り出す家族や祭司が、旅人を励まして歌った言葉なのでしょう。旅立つ側と見送る側のやり取りから成るのが、この歌なのです。

それでは、出発する旅人はどのような思いで山を見上げたのでしょうか。日本のような「兎追いかの山」は考えない方がいいでしょう。古代のパレスチナは、現在よりは緑が多い土地であったと言われていますが、それでも、山はごつごつした岩が続く厳しい荒地、誘惑の地という感じのものだったはずです。旅人が行く道も安全ではありませんでした。山道から転落する危険もあれば、盗賊や野獣に襲われる危険もあります。旅の途中で病に倒れることも珍しくなかったでしょう。

そのような山路を、自分は進んで行かなくてはいけない。果たして都にたどり着けるだろうか。行く手には何が待ち構えているのか。そのような恐れと不安が、「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか」という言葉に表されているのです。

けれども、その不安を吐き出すと旅人は頭を切り替え、「いやいや、この山も神によって造られたものではないか。その神こそが私の助け手ではないか」と、神に思いを向けます。それが、「わたしの助けは来る／天地を造られた主のもとから」という2節です。

その彼の言葉(ある意味で信仰告白です)を受けて、送り出す側も神の守りを約束する言葉を歌って行きます。この部分も「山を越える」というイメージをもって読み直すと、実にリアルな感じがします。

例えば、「主があなたを助けて／足がよるめかないようにし」て下さる、主はあなたの右におられるということも、細い山道のことを考えると非常に現実的です。足を踏み外したら落ちるかも知れない。しかし、主が隣から支えて下さるので、しっかり歩めるというイメージがわきます。

さらに、「主はあなたを見守る方／あなたを覆う陰」だという言葉は、心に染みます。灼熱の太陽の下で、自分を覆ってくれる日陰がいかにもありがたいものであるか。いかに日射病などから命を守るものであるか。このことを、中東の人ほどよく知っている人は他にいないでしょう。神はそのようにあなたの日陰になって下さる。あなたが気づいていない時も共にいて、守っておられると言うのですね。それゆえに「昼、太陽はあなたを撃つことがなく」となるのです。

「夜、月もあなたを撃つことがない」という節は、野宿の夜のことを指します。屋根が無い場所で夜明かしすることは、体にさまざまな悪影響を及ぼすと言われていますが、昔はそれを「月光にあてられる」と考えていました。そうした夜にも、神は一緒にいて下さるというのです。

そして最後に「あなたの出で立つのも帰るのも／主が見守ってくださるように」という言葉が来ます。あなたの出発も帰りの道も神が守って下さるようにという祝福ですが、この言葉を胸に抱いて旅人は道を歩み始めます。

このイメージだけでも心に響くものがありますが、この詩編を私たち自身にあてはめてみると、一層身に染み入るものがあるのではないのでしょうか。

私たちは登山などはしないかも知れませんが、大きな問題や悩みにぶちあたる時、まるで高い山に直面しているかのように感じることはないのでしょうか。

不思議なもので、問題や悩みは見上げれば見上げるほど、ますます大きくなって行くような気がします。最初は自分と同じぐらいに思えた問題が、どんどん大きく思えて来て心をつぶしてしまふ。そのようなことは無いのでしょうか。

このことを思う時、私はつい連想することがあります。皆さんは「見越し入道」、あるいは「見上げ入道」という妖怪のことを聞いたことがあるのでしょうか。水木しげるのファンでもない限りはあまりご存知ないと思いますが、この妖怪は、夜道を歩いている時、大きな坊主の姿でヌッと行く手に現れます。この妖怪を見上げてしまうと、もう駄目です。見上げれば見上げるほど、この入道はどんどん大きくなって行くのです。そのままだとやられてしまいます。

しかし、この妖怪から逃れる方法があります。クルッと後ろを向いて、股の間から相手を覗きこみ、「見越し入道、見越したぞ！」と言うのです。股覗きをしている間は、相手は上下逆さまに見えるので、見上げることになりません。そうすると妖怪は退散します。

礼拝の場で何の話をしているのかという感じですが、これは実は、先ほどの悩みに関する話と似ているのではないのでしょうか。

私たちの悩みも、見上げれば見上げるほど、見越し入道のようにどんどん大きくなって行き、そのままではこちらが呑まれてしまいます。そこから逃れるには、いったん目を離し、心を整えてから再び向き合うしかないのです。それがまさに、今日の歌にある

「わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る／天地を造られた主のもとから」ではないでしょうか。

残念ながら、見越し入道と違って、現実の問題や悩みは、股覗きをしても消えてくれません。山は、依然として目の前にそびえています。

私たちはそこを登って行かなくてはいけないのですが、それは決して一人で登って行くのではないです。右にいて下さる方が、私たちと一緒に登って下さる。私たちが気づかない間も神は私たちを支え、日陰となって下さる。この旅立ちの道も、いずれ帰って来る道も共に歩いて下さる。この詩編はそのように私たちに呼びかけてくれるのです。

このことは、現在の本学にとっても大切なことではないでしょうか。新型コロナウイルスによって引き起こされている混乱は、まもなく始まる予定の東京オリンピックの問題もあり、一向に静まる様子がありません。これから社会で起きることが、学院の将来にどのような影響を与えるのか。いつまでこの騒ぎは続くのか。何もかも見通しが立たない状態です。このような時に、こうした多くの問題だけを見上げていると、正にそびえたつ山のように思え、呑まれるような心地がして来ます。

そのような時にこそ、この詩編を思い出したいと思います。ここでは、「わたしに助けはあるだろうか」とは言われていません。「助けは来る、主のもとから」と断言され、全てはこの一言から始まるのだと示されているのです。私たちがそう言えるのは、主イエスが十字架という、この世で一番悲惨なところに至るまで私たちと共に歩いて下さったことを知っているからです。十字架は、神が決して私たちを独りにはせず、どこまでも共にいて下さるといふ恵みの象徴です。この主を信じて、共に山を登って行く心を持ちたいです。

最後に、大切なことを付け加えます。今この時に険しい山を登っているのは、私たちだけではありません。将来の見通しが立たない中で、学生たちも制約が多い大学生活を送っています。強いストレスを感じて、学業を続けることが難しくなっている人もいます。家族の経済状態が不安な人もいます。

そのような学生に対して私たちは、この詩編で言われているように、暑さの中の日陰となるようなサポートをしたい。彼女たちが山道を歩み続けることができるように共に歩む、そのような助けをしたいと思います。私たちが全員で共に山を越えて行くことが出来るよう、神の支えと導きを祈り求めつつ、歩み続けましょう。